

1977

特別支援教育

「ぼく死にたいんだ」

教育

新宝島



4月特典

向山洋一教育資料

No. 05

2024  
APR.

## 本資料について

向山洋一氏のデビュー作『齋藤喜博を追って』（昌平社）の中に次の一文がある。

放課後、雨の校庭をながめていた時だった。4年生の男の子がぼくの側に来てしばらく休んでいた。彼はしばらくして「ぼく死にたいんだ」と、ぼつんと言った。

男の子はS君といった。翌年4月、向山氏は「ぼく死にたいんだ」とつぶやいたS君を担任することになる。

向山氏はどのようにこのS君との出会いの準備をしたのだろうか。

この冊子には、以下の実物資料が収められている。

- (1) 向山洋一『学級通信スナイパー』調布大塚小5年1977
- (2) 向山洋一「S君の記録」ノート
- (3) 向山洋一「メモ（S児の暴力は病気か）」
- (4) 向山洋一『齋藤喜博を追って』（直筆原稿）

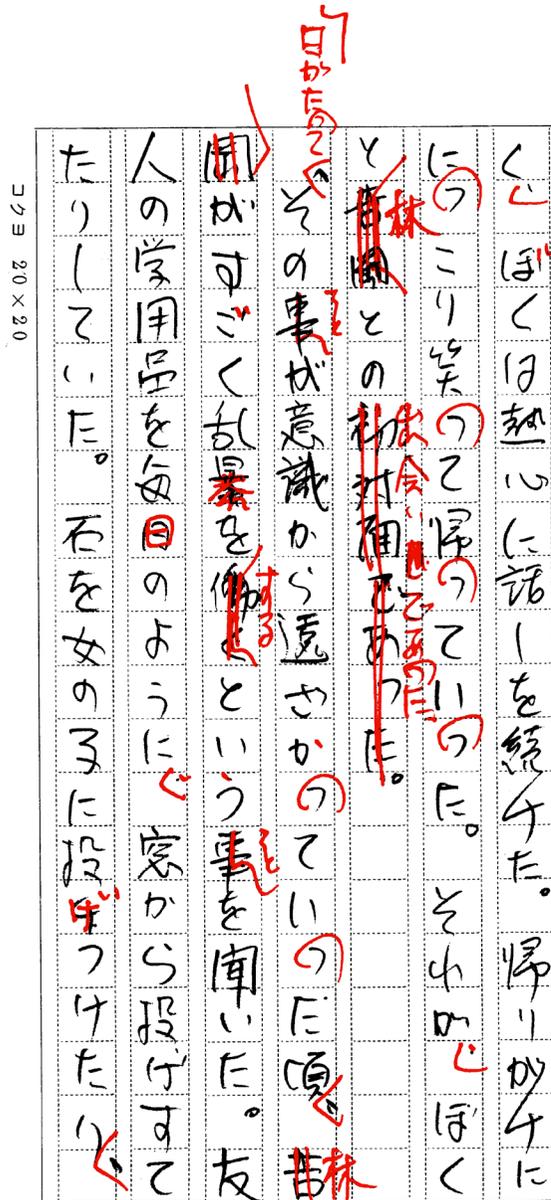
(1) には、「学級びらき」から、S君が大きく変容するまでの約1か月半のドラマが記されている。

(2) は、今回、向山氏の実物資料を整理する中で初めて発見された未発表のノートである。前担任との引き継ぎ。親との面談。今後の基本方針等、その具体的で緻密で記録は、特別な配慮が必要な子どもさんを担任する先生方の参考になると思う。

(3) も (2) と同じく、今回初めて発見された未発表のものである。S君を担任するにあたり、向山氏の気概と覚悟を見ることができる。

また、(4) では、デビュー作を執筆するにあたり、向山氏が何度も推敲を重ねた跡を見ることができる。

なお、今号の解説は、小嶋悠紀氏である。





# スナイパー

1977. 4. 6

NO 1

調布大塚小5の1級級通信

出逢いの序章

その1く手前、教師職世を被業といたします。>

◇ 質問1 「奴の略歴は？」

昭和18年9月15日、旗、台生れ。旗、台小 荏原五中、小山台高  
東学大卒。妻あり。子なし。大森才皿小。調布大塚小で。経験10  
年目。前6年2組担任

質問2 「奴の風(ぶふう)は？」

身長176cm 体重78kg。太め。視力左右ともに0.3。眼鏡を常  
用し。矯正視力左右ともに2.0。仮名はタヌキ。自称アランドロ  
ン。(アランドレでは居い)

質問3 「奴の長所は？」

語るに足るものは居いが。しいていう居らば執念。

質問4 「奴の短所は？」

自己陶醉するほどのうぬぼれ。自信過剰。低俗趣味。喫煙・飲酒  
過多。一しかやら居いのに十を言う。自分の弱点への甘さ。だら  
し居いこと。不注意なこと。ごうまん無礼。

質問5 「奴の教師の腕は？」

未熟。あんが奴が担任に居った事に心から同情する。

質問 6 「奴の教育信条？」

これだけは人並にどさっとある。

- A. 「ひいき・差別が存在する教室での「教育」は、教育ではない。それは口先だけで、書くことはできず、教師が必死にならねば、存在するほどの強固なものではない。」
- B. 「すべての人間には、限りない可能性がある。それを信じる頑固さにおいて、それを具現化する執念において、自分は他のいかなる人よりも劣りはしない」と信じる。」
- C. 「教室における平等とは、どの子どももといわく「先生は私をひいきしてくれたい」と思える状態を創ることである。」
- D. 「教育とは、何かを創造していく、可能性をひきだしていく、闘いである。のんびりだらりとやったり、情性でやったり、形式的にやったりしてできる代物ではない、何も無いと思える所からでも、何かをひっぱり出すような、極めて激しい闘いである。」
- E. 「教育とは、教師と親と子どもが、連帯してこそ成り立つものである。〈先生にあまかせします〉は、結果として教育の放棄である。」
- F. 「学習は、正直さ、誠実さがあってこそ、権力的に伸びるのであるが、(いわゆる「優等生」)は、この二つが普通は欠如している。(いわゆる「優等生」)の学カは、普通は質が低く、発展性さえ無い。教室を支配するそうした質の低さの否定から、教育は出発する。」

# すなはち

1977. 4. 17  
No. 2  
5の通信

## 出逢いの序章 その2

- ◇ 前号に、「ぼくは教師喪世を職業としている。」と書いた。こういう、ヤクザ  
写人向が嫌いな人の為に、少々くどい説明をつけ加える。  
ぼくは「子供が好きである」「子供の為に何かしてやりたい」というふう  
考えで教師になったのだから、現にそういう考えで教育をしているの  
ではない。極端に言えば、そういう考えは全くないし、そうした優美な考え  
方も嫌いである。
- ◇ 教師になったのは、自分自身のためである。他のいかなる職よりも、教育  
という職業が、ぼくの生きている証しを刻んでくれると思ったからであり、  
自己の存在感が実感できると思ったからである。そうした自己の生きている  
証しを刻みつけることが、結果として、子供に良かった場合もあるかもしれない。  
しかしこの〈原因〉と〈結果〉は逆転できるものではない。同じよう  
でいて、全く非なるものである。〈りんごが食べたから食べる〉のと、〈  
健康を維持するために必要だからりんごを食べる〉ぐらいのちがいはある。
- ◇ そとそと〈職業〉が楽しいとんてのはめったにない、囲碁と将棋と楽しい  
ゲームだが、それを〈職業〉としたら話しは別だろう。〈好きではあるけど  
苦しい〉と、棋士は一樣に述べている。これは、どんな〈職業〉でも同じだ  
ろう。〈好き〉ではあるし〈楽しい〉ときもあるにちがいはないが、〈苦しい〉

と思う方が多いにちがいない。その職に徹せれば徹するほどそうであろう。芸とか腕とか技術とか専攻とかは、そうした中で少しずつ創造されてきたものであると思う。楽しいのは アマチュアのうちである。プロになれば、証しはちがってくる。

◇くたび箱のとべるだけを集めて それが30人までなら、15分で30人全員をとび箱がとべるようにしてやる。こんな事をほくは良くいう。実践してみせた事もある。これがプロの腕であり、どれほどスポーツの得意な父母が、どれほどの時間をかけてもできるものではない。クラスの中で、何かを教えて、合則、7割までほと父母でもできよう。く大体できた、教育なんてちょろいものだ。> と思いがちである。ところが それから先が大変なのだ。困難は幾何級数的にふえる。前のクラスで38名全員を、25m以上泳げるようにした。残りの1名2名は、36.7名教えた従量より時間を労力と腕と必要とする。しかし、そうした厚い壁を越えた時こそ、越えた本人と見ていた人内は、人内の可能性の永遠なるを実感でき、困難に挑戦する意欲と生まれるのである。

◇ 前号の見出しのく今前、教師職世を稼業といたします。>は、そうした内容をこめて、書いたものである。

◇ スナイパー <sniper> 狙撃兵の意である。ターゲット(標的)は何か。自分自身と教育の実能すべてである。ほくは、弱く、甘く、未熟な教師だ。その自分の弱さを射抜ける事こそ、この稼業で務めする自分に課した責務である。どの稼業もそうであるように、教育も又、多くの俗人がラクタと少数の珠玉から成り立っている。従ってほくは、教育の実能を、そのすべてを、(自分自身を含め) まず疑がってみる事になっている。

# すなわち

NO 3  
1977.4.17  
5の通信

## 出逢いの序章 そのろ <閉幕のドラマ>

◇ 始業式が終って教室に入った。始業式の時、しきりに穴を掘ったりしていた男を、4-5名を立たせ、そのだらしない様子を批判した。伊藤・竹山・芝原の3名を次に立たせた。この3名だけが名札をつけていた。出逢いの時に、名前を覚えるのに必要なのだから、その3名を(ほめくそいであたりみえだ)と(ほめ)残り全員を立たせた。新学期の出逢いに、「諸君がそんなに鋭感で、無神経なら、俺はこの3名しか名前を覚えたい」と、きびしく言った。教室はシーンと静かになった。竹山に号今をかけさせ、あいさつをした。俺の顔を見ながらニヤニヤして礼をする無礼なやつ、まだ終わらぬうちにすわってしまうぞ、ぞっかしいのがいたから、何度かやり直しを命じた。

◇ ついで、要旨次のように話しをした。

「俺と一年間はつきあう運命にあって、内心(いや)な思(い)をして(い)る人も(い)ようが、できたらがまんしてほしい。出立にあたり、(いくつかの事)を言(い)ておく。オ-に、ひいき・差別(は)絶対(ぜい)に(い)ない、許(ゆる)さない。俺(わ)は(けんめ)に(う)つ(ま)る(が)、(それ)で(よ)う(な)あ(ひ)き(し)て(い)る(よ)う(に)感(かん)じ(ら)れる(事)が(あ)る(か)も(い)い(な)い。その(時)は、えんり(よ)う(に)言(い)って(ま)ら(い)たい。

オ-に、諸君(しよ)の(い)ん(ど)ん(も)残(のこ)ら(な)い。先生(せんせい)が(か)し(こ)く(し)て(や)る。でき(き)る(よ)う(に)し(し)て(や)る。で(よ)、こ(れ)は(先生(せんせい)だ)け(が)や(や)って(ま)い。君(き)達(だ)が(う)つ(ま)る(よ)う(に)し(し)て(ま)い。その(た)め(に)二(ふた)つ(の)こ(と)を(こ)ろ(に)し(し)て(ま)ら(い)たい。ひ(ひ)ど(つ)は(く)教室(きやうしつ)と(い)は、ま(ま)ち(が)え(え)る

場筋だということだ。あらゆる学問は、まちがいのの中から発展させられてきた。〈自分はできる〉と思ったり、〈自分はできない〉と知っているのは共に錯覚である。どちらにしても、諸君が思っているほどではない。

◇ 黒板に数字を書いて、「0(ゼロ)は何を意味するか」聞いてみた。苅原がさっと手を上げ、他に5、6名いた。苅原に指名すると「何もない事です」と答えた。それをほめ、手を上げた5、6名を立たせほめた。そして「何故、手を上げない。内心ではそんな事とってるんだろう。しかし手を上げた人と上げない人では天と地ほどの差がある。上げない人は、まちがえたら恥ずかしい、かっこ悪い等と、かっこつける事だけ考えていたからだ。天と地ほどの差があるんだ。」ときつく言った。

しかし「ゼロの意味はこれだけでない。思いついた事を何でもいいから言ってみなさい」と言った。名取と伊藤の2名しか手が上がらなかった。名取は「出発点」と答え、伊藤は「0、1、2の0」と答えた。温度計の0度は温度が何もないことではなく、基準である事を話し、その二人をほめた。ゼロは他にも意味があるが、省いた。ついで漢字の「山川」を書き、「読みなさい」と言った所、苅原がさっと手を上げ、4、5名があがった。苅原を指名すると「やまかわ」と答えた。「他にもある」と聞いたが誰一人答えられなかった。「やまかわ やまかわ さんせん」のちがいを説明した。「このように、できるできないと違って差がない。一年生の宿題ですらこいねのだ」と話した。「うんとまちがえなさい。まちがいの山をつくりなさい」と言った。そして毎日二時間、板に向かうよう要求した。苅原をのぞいてみんな手を上げた。苅原は自信がないというのだ。その正直さをほめ、苅原は努力目標でいいことを話し、他の人はやるというのだから、やらなかったらその人と同じくやってもしないと言いきり、40分を越えた。そのあと二時間、何も手がつかないほど、つかれていた。

# スナイパー

No.4  
77.3.8  
5の通信

去年の運動会のリレー  
矢張りのこととした

学芸会で、イソアの中のか  
やオのかが6の2です。

よからたら先代の学級通信  
1冊6の2の人に借りておき  
3巻、4巻は、貸し出し用

## 出逢いの序章 その4

- ◇ 春休み、持てる時間のすべてを使い、このクラス（ほくにあって四代目）の教育をどうするかに費した。構想を練るには春休みは短かすぎるとというのが実感である。ほくは、一代目、二代目、三代目はそれぞれちがった内容でちがった方法で、その時の自分にできた最高のもので教育してきたつもりだし、四代目もまたそうするつもりだから、よけい春休みは短い。
- ◇ 前6の2の学級通信「えとせとら」才四巻（No.151～225）の序文に次のように書いた。

「いまだ残る多少の事務的仕事をしつらこの序文を書いている。ただ今3月28日、本日中でこれらの仕事を終る。〈卒業以来〉淋しさで悲しさで充実感にふたっていた数日間の生活に別れを告げる。俺も又出立する。明日からは 四代目の名前を覚えるのに必死に努めよう。6の2の破壊と否定の上に 二年度の構想を考える事だろう。そうした時、俺は一切うしろをふりむかない。待つかしだけで6の2の生活を考える事はない。自分の全力をあけた 自分の限界まで追求したく6の2という>作品より更に質の高いものを創るにはどうすれば良いか、何が必要か、特に自分自身の何を否定していくかという点でしか考えない。四代目と共に、最高の内容と質を持った教育をいかに創造していくかという事しか考えない。」

で、3才4才のクラスの人々の今後の記録も何度も読んだ。前担任からのひきつぎも、必要に応じて何十冊かの本、研究誌を>読んだ。必要と思われる人に二十人近く会ったり、意見を聞いたりとした。四年生の時の家庭調査票まで目を通した。<空欄><特になし>の記入が多く参考にならず失望としたが…とにかく、あらゆる手段で、今のほくにできる限りの準備はした。

◇ 昔、研究会で坪下の教師仲間にとまった事がある。乱暴なるの話しをした所「私とそっいうるを教えた」というのだ。<わしく聞いたが何も分らない>。「医者も 熱が39度あると患者に言われた時、現象としての39度の熱だけを考えるか。それが何による熱なのか 必ず原因を考え、それにあった治療をするだろう。同じ39度という現象でも原因は同じではないんだ。君の言った「それと同じるを持った」というのは、医者が「前に39度の患者を持った」というのと同じで、何の足しにとりたない、ここは片手端会議の場でもなければ、おしゃべりの会でもないんだ。そんな素人みたいな事をはずかしげも無く言うな」と、どまったのである。

◇ 家庭調査表に書かれた内容は、その裏にたくさんの想いがあるのだろうという事まで含めてうけとった。すぐにできるものもあるし、時間がかかるものもある。しかし、決して、(100%)をいはい。素人のようには受けとめ方はしない。必要ならほくの所向のすべてを優先して追求する。

◇ 竹山は左ききである。本人に聞いた所「家では直せというが、ほくは直すつもりはない」と言う。実に男らしく言った。調査表にこの点の記入はない。無理に直すとどより、筆の害が多く出るし、ほくは直す必要はないと思っっているのを彼に同意した。漢字の書き順は右ききの人のもので、彼には、左ききにあった書き順で書いて良いと指示した。

のが向山です。  
こうもりを  
信ぐとせら  
兼叶下さい。  
と少しあります。

へ  
二  
日  
目  
名  
札  
を  
た  
い  
だ  
者  
が  
な  
あ  
三  
名  
い  
た  
く

# スナイパー

No.6  
77.3.8  
5の通信

御意見、御感想  
ぜひお寄せ下さい

## 出逢いの序章 その6 南幕のドラマ Part II

- ◇ 座席を決め、印刷物を配り、早速授業をした。最初の授業は自分の名前を漢字で三回書かす事である。一人一人持ってこさせ、ダメなのはやり直しを命じる。実は「ゆとり」とやらがあれば、これだけを一週間やりたいのだ。そうはいかぬから、さわりでおしまいである。
- ◇ この事だけで、その子の性格、学習態度、今までの積み重ね、はては机の上の様子まで、大体わかる。もちろん概略である。百発百中とはいかぬが、90%はあたる。「机の上がいつも乱雑なんだろう」「まちがえるとやだと思って手を上げないだろう」等と言うと、ほとんどの子はうなづいていた。
- ◇ あたり前のことだが、字がしっかりしており、ていねいで、三つとど乱れはないのがいい。斜めになったり、最後の方がだらけたりしているのは、たった自分の名前を三回書くことすら耐えられないのだ。書き直しをさせると大体しっかりしてくる。しかし一向にかわらないのがいる。実は、これが難物なのだ。こうした子は、ある程度までくると伸びなくなる場合が多い。10才にしてすでにパターンが強固にかたまっているからだ。その後、ノートを書く時、きちんと書くよう話した。
- ◇ 次は算数だ。今日と芝居がよく手を上げ、大活躍だった。つらいた様に他の子と上げ出し、全員があげる場面と何度か見られるようになった。手をあげないと罰査票にあった人といいたが、あれはうそだろう。みんな手をあげる。

を  
1)

それとよ、茂原のせい。茂原のおかげで、彼がさっさか手をあげ答えて  
しまうから、みんなもそう思ったのか？ とまれ、昨日と格段とちがって  
いた。

◇  $4+2=$  を聞き、ついで  $4m+2$  を聞いた。とてと傑作だ、 $6m$ と  
か、 $6$ とか、実はこれは「くできんい」である。又は「 $4m$ と $2$ 」と答えるしか  
ない。後者が、 $6$ 、 $7$ 名あり、ほめてあげた、計算器でもできる事をやるる  
が算数ができると思いがちであるが、基本を考え考えやるるで「いい」と、こ  
ういうのは手が出る。

◇ 次に①  $4+2=$     ②  $4m+2=$     ③  $4+2m=$     ④  $4m+2m=$   
を出す。①は $2$     ②は $2m$     ③は「できんい」    ④は $2$ が答えである。〈できん  
い〉という便利な答えを覚えた子は、②と ③と ④と〈できんい〉等と書  
く。正解、それ以外の名前後である。「少しは自信弱くなったか？」と聞  
くと、うなづいている。

◇ 次は ①  $4 \times 2$     ②  $4m \times 2$     ③  $4 \times 2m$     ④  $4m \times 2m$   
である。①、②は正解が多かった。しかし③を「できんい」とする子がほとんど  
である。 $3 \times 2$ は $2 \times 3$ と同じ、 $3+2$ は $2+3$ と同じ事は、昔やっている  
のだ。交換の法則 ( $a \times b = b \times a$   $a+b = b+a$ ) は、足し算、掛け算のみに成  
立する。交換の法則は、割り算、引き算では成立しない。従って③は $8m$ で  
ある。本日一番の見物<sup>ポイント</sup>は④である。全員が「できんい」というのだ。  $4m \times$   
 $2m$ はできる。答は $8m^2$ である。長方形の面積である。

◇ どんん感想を持たれたらう。〈できる〉と自信を持ちすぎ「いい方がいい  
〈できんい〉と自信を弱くさなくていい」という事が、少しはおわかりした  
だけであらうか。

① どの子の瞳をうるんでいた。S男は更に読み続けた。つかえるとみんな助けてい  
せきばら一ツ。その音一ツしなかった。一ページ余り。全部読んだ。再び嵐のよう  
越く長く激しく高らかにひびく拍手だった。ついに鉄の扉をこいあげたのだ。固  
軽の輿の心と、33の小さな心と教師の心を一つに揺りあわせられたのだ。

終ったあと校長室のソファーに横に横た。身も心もつかれ切っていた。誰も話したくなかった。ボロボ  
ロに疲れた心の底から、熱いものがこみ上げてきた。熱い川は次から次へと押し寄せ、とめどなく流れる

嵐のように熱く長く続く拍手

スナイパー No.42 77.5.25

- ◇ 四時間目。国語の時間である。休み時間にS男がやってきて、「熱っぽいから、勉強する気がないからね」と言ってきた。熱がある時、S男は気が悪くなる時が何度かあった。そんな時、彼は何を言っても通じないという面があった。どれだけの言葉と態度を使おうと、かたくなに拒絶した。それは、まるで、心に鋼鉄の二重、三重の扉をしたみたいであった。そうである時、彼は優しい優しい子どもであったが、ひとたび拒絶すると、鉄の扉にかくれてしまうのだ。
- ◇ 授業が始まった時、教科書を出しておらず、当然の如き顔をしていた。何度注意してもだめであった。ほくは、彼の机の中から教科書を取り出しひろげた。彼は、冷たい目をしてそっぽを向いていた。
- ◇ 順番に教科書を読んでいった。四番目が彼の番だった。彼は一向に読もうとしまい、と后りの子や前の子が何度か読ま場所を教えたが、だめであった。ほくが何度さいそくしてもだめであった。  
「読まない」という状態を黙認するかどうか、しばし迷った。黙認する事は彼の存在を特別として認める事であり、34名のクラスを、33名+1名にしてしまうことだった。しかし、あの鉄の扉があけられるか不安だった。いや自信はほとんどなかった。しかし10年間の教師生活でつちかっていたものと

彼との2ヶ月の生活が「それでもアロの教師か」「一人残らずと言えるのか」と、せきたてた。教室は重く重い空気ではりつめていた。33名の子どもが息を殺して、ぼくとS男に注目していた。

◇ 椅子ごと身体を出し、本を持って立たせた。このクラスにほって始めて、荒々しい言葉を使った。三代目まではビンタもよ<sup>く</sup>していたが、今は手を上げるのはあろか。大きな声さえ出していい。荒々しい言葉に、S男の扉は更に固くとじられた。冷たい視線だけが返ってきた。

「君はこのクラスの一員だろう。それならば読み返さい。それとも君は、自分一人だけ特別にあつかわれたのか？ みそっかすになっていいのか？」

「君には、読める目もあり話せる口もあり読む力もある。読み返く返い返んで、せいたくを言うんじゃない。読み返くても読め返い人といるんだ」

「先生は君の言うことを99%読めできた。しかし、どうしても許せ返い事もある。ここは教室であり、君達ばかりこくなる場所だ」

何をいってとだめであった。あの米のようほ冷たい目の中にとびこみ、固い鉄の扉をこじあげ、殻をこわし、やわらかい心まで届くすべは返いのか、何れもひるんだ。とり返しのか返い事をしてるんじゃないかと思った。

◇ 執念しかなかった。教え子を前にした教師の執念だった。夜中までとつきあおうと深意した。ここで負けたら終りだと思った。「何時間でもやろう。昔9時間やった事がある」そう宣言した。重苦しい時間は続いた。

何か一言いった。小さほ小さ返争だった。「やれる」と思った。子ども達は本をきちんと持ち返あした。何かが始まりそうほ、はりつめた空気が流れた。「そして…」ついに読んだ。一行読んだ時、崖のように長く続く、熱い拍手が起った。人生に何れもあるものでは返い。魂がゆるみ返り返した時の拍手だった。どの返の顔も輝いていた。どの返の顔もほほえんでいた。どの返の

返上へ長く

# スナイパー

No.44  
77.5.27  
5の1  
通信

教育は手段ではない。瞬時に変わる事柄どまり得る  
ほくも子供も全力を尽くして 居あ、目にとまりぬ  
ささやかな変化しかうまい。そしてそれは砌上  
樓閣の如く、いくたびと崩される。しかし、何れでも  
うした砌上の樓閣を倉庫の底の後にしか、そんな  
しい行為の中からは、たしか教育はうみ出せぬ  
と思う。 <向山>

嵐の如き拍手に叫び、母なる大地から

## A男の母

◇ 私は今、こみあげる感激をどう押える事も出来ず、思わすつたほいペンを握りました。教室での出来ごとが まざまざと想像出来ます。

他人事では無く、我が事のようにうれしく思います。人間にとって、人と人とのぬれあいが、直系の人との出逢いが、何にとまりて財産だと、いつも思っておりましたが、先生を見ていると今さらの如く痛感いたします。

「教育の焦点」を、先生は紙上を通して常に教えて下さっておりましたが、この様にきめこまかい教えをまのあたりに見て、<アロの教師>の心がまえに感動いたしました。

抱かこむような暖かい思いやりがひしひしと身にしみて、感謝の私は流れる涙を押える事が出来ませんでした。

勉強も勿論大切です。しかし毎日の生活の中で、そこにどれだけの生きがいを感じ、目を輝かせて生きていくかも、大切だということです。毎日の、少しずつの積み重ねがいかに大切かという事も……

先生と人の、毎日毎日、目一杯の荷物を背あつて、緊張の連続では、いつかきずつき倒れてしまいます。どうかお体には充分気をつけてお過ごし下さいますように祈っています。子供だけを、私とスナイパーを

心の糧としていきます。頭の痛い時もありましょう。かせをひいてお熱の高い日もありましょくに……。どうかそんな日は、私の出来る印刷などでもお手伝いさせていただきたく思います。何かすべきではないかと思いつから、その何かか解らず「暗中模索の日々です。

まもなくスナイパーと50号が発行されます。何と素晴らしい事でしょう。今日の感激をあらたにして、私も子供と頑張っまいます。

#### ◇ B男の母

今、スナイパーを読ませていただきました。感激で胸一杯に存りながら先生にお礼を申しあげてくやんを取りました。彼はもちろん、我が子、他の子に代り、本当に心から「ありがとう」を云わせて下さい。この日を、子供達は4年間待っていたのです。+1を存り、皆同じクラスの仲間になることを…… どん后にか望んでいた事でしょう。それを先生がやって下さったのです。先生、本当にありがとうございます。〈以下略〉

#### C子の母

◇ 娘が学校から帰るが早いかくスナイパーを拜読してあります。毎日、感心したり、感激したり、時には笑ったり……

でも、今日程 私が胸うたいた事はありませんでした。No42を読んでいくうちに、胸はドキドキ存り、目は走るように字を追いかけてました。終りの方では目頭が熱くなり、読み終った途端こみあげてきました。そして、さう一度、ゆっくり読み返しました。教室での先生の毅然とした態度、そして子供達のその光景を見守る不安な顔が、頭の中に鮮明に映るのです。

先生本当におめでとうございいます。そして自分に打ち勝ったS君おめでとう。心から拍手を送ります。この様に子供一人一人に対する細やかな神経の行き届いた教育を体験している子供は本当に幸せです。誓として感謝に堪えません〈以下略〉

スナイパー

No.46

77.6.2

5の1

かほ！ 前の事にはありますが、小数のかけ算の  
返しま た、95点100点でクラスの半数でした  
80以下、何かいほしが、基本はきちんとしてき  
確かかほごたえを感じました。前回100点では何  
100点の子が9名おりました。

### すべての子どもに生きゆく力を！！

◇ No42に対するたくさんの感激に満ちた手紙を受け取った。すべての人間の心を溶かし込んでいく巨大巨ドラマの幕あけであった。これは、まろんほく一人がほしとげたものでほほい。クラスの仲間、父母、三代目の子ども父母、大塚小の教師達、そして何よりも、S男とその家族の人々によって創られた出立の旅煙であった。ほくは力弱い一人の教師にすぎほい。教師の職にあれば、プロであるにちがいはほいのに、それをわざわざプロの教師であるほどと言っているトンチキな人間だ。しかし、そんな弱い人間でも、自分のまわりにあるすべての教育作用を組みあわせ、集中させていけば不可能と思えることとほしとげられるということだと思ふ。

◇ 手ばほしの感激の手紙への返信に次のように書いた。「そうした感激を共有したから、そしてほげまされほがら、ほくは手ばほしで喜こべません。手ばほしで喜こべるのは「他人」だからほのです。親は喜こびの中にすでに先を見通した感慨かあろうと思ひます。ほくも、そうした親の心情までほみ込んで考えたいと思ひます。たった一つのドラマで、口先だけで人間が変わるのでしたら 教育ほど楽ほことはほほいのです。反対に 何度も失敗し 何度も裏切られ 何度もほじめほ思ひをし、そしてほあ その中に可能性を見出すことに教育の原点はあるほのです。ほくかやっほしたのは、鉄の

扉を本当に開けた とてはありません。穴を、それと金( )穴ほどの大きさの  
 穴さほものを開けにすぎません」

◇ ドラマの翌日、S男は小さいシャベルで男の墓をたたく。何の事も  
 なかったが、ほくはやり切れなさに怒りをもやし、腕をつかんで校長室に連  
 れていった。「ほくはやってない」とS男はいいはった。何度正しても駄  
 目だった。ほくは思い切りビンタをした。針の穴ほどに対する絶対の自信  
 があった。彼は冷たい目を返さなかった。突然「ワーン」と大声で泣き出  
 した。それは思っても見なかった事であった。「ほくはすぐ忘れるから」  
 と小さい声で言った。「そんなはずはあるんか」とたたくかけると、「すみ  
 ませんでした。うそをつきました」とあやまった。とても素直な、かわい  
 らしい表情だった。教室にもどり、すねにあやまった。

◇ 針の穴をこじあけた感じだった。しかしこの日からS男は変わった。本質  
 が、かわりはじめたのだった。国語の漢字ノートにとり組むようになり、  
 算数の計算をやるようになった。漢字の書き順がわからず、お手本を書い  
 てやり、鉛筆を一緒に持って動かしたりした。S男は休み時間でもやっ  
 ているようになり、廊下を走る物音に顔をしかめるようになった。

小数のかけ算のドリルで、100点をとり、職員室に持って行って、校長、  
 教頭はじめ、多くの先生にほめてもらった。当麻晃介のテレビ録音で司会  
 をやり、原稿をけんめいに準備し、見事にやり通した。

◇ 本日、何人かの席を入れたのだが、S男は「もっと勉強したい」と言  
 って、一番前の席にうつった。 $3.5 \div 2.5 = 1.4$  は「何を1とする時、いくつが1  
 づくにあたるのですか」という問題を、上田、竹山、神倉と、8名ができずに立ってい  
 る中で、正答を何度か答えた。「どの人も可能性のある」ことを、S男は事実で示した。  
 5の1は誕生以来、また2ヶ月である。その内の前進はささやかなものにすぎない。  
 しかし、何と価値ある日々であったのかと、ほくは思うのである。

作物の産出録 4冊 (小巻) (全巻全巻巻. 51. 12. 1より)

7/1 清輝時間. 6年生は風呂から着た服を自分の服といひはる.  
 学校まで. 自分他人別別の服装.  
 「ほくのとちかう. ぶいせん」

7/4 休み時間. 玄関で石を投げる.

5年男子がからかう.  
 「ちやうどおれが鬼にや」

石を投げる.

402の扉が止めたS. 階級をより投げつけた.  
 <母親をのたまし弁償させる>

7/6  
 ・Pの子の箱根からけに石を投げる.  
 ・野村の筆箱を窓から外へ捨てるなどの出来事がある.  
 ・清輝時間には窓から外へ石を投げつける.  
 ・音楽室で5年生とけんか. 足げりされる.  
 <母親をのたまし注意>

7/8  
 ・体育のハンドバースの最中. バースを3mする.  
 ・相手チームの女子が二重入子と髪を生えつかみ. 足を  
 踏む等をする.  
 ・体育の前に入る石を子個持し. 女の子を追いこ  
 ける. 銅線生衣を剥ぎ取る. 女の子を叩  
 いて投げる. 下靴を履かせる.(かき).  
 ・M3の足元の草を. 図書館に入しこくる.

「M3は自分で言わねえで.  
 人に言わせる」から.

髪を  
 突.

石を投げる.

下靴を履かせる.

7/11 帰り 「ほく馬鹿の風呂から着た服を自分の服といひはる」

7/8  
 母親のなか.  
 「反正是に性感をおけたい」と  
 「おれとわいのは時期が早い」と母親.  
 反正是に違ふこと. 夏休みの正さき話と区別する  
 (母親担任)

7/6  
 野村をけんか. 靴と袋の外へ投げる.

靴を踏む.

7/21 休み時間. 2年生の女子に石を投げて. 肩にけをさす.  
 注意しとす松村先生に悪口を言う.  
 ・3年生の馬の子. 髪のをこする. 口生に吐き出す.  
 ・野村を野村の物を窓から5. 6回投げる.

石を投げる

髪をこする.

口生を吐き出す.

7/21 母親に連絡.

7/15  
 福生達の筆箱を. 同110の子と9人の衣服を盗む.  
 511にちかて. 投げつける.

筆箱を盗む

7/18  
 野村の学用品を池に投げこむ.  
 指示してある習字の紙を破る.

学用品

習字の紙を破る.

7/21 休み時間. 110 - 117で野村を追いこける.  
 「野村を殺してやる」  
 合衆社の抗議.

野村. 殺したと子  
 110 - 117.

1/29  
 ・学習用品を授け出す。(他人の物)  
 (目標は、野村)  
 ・担任の、ブラスのレコーダー。年ごとの。  
 ・散髪先生にゆめく。足げり。頭つき。  
 帰校の時刻(散髪先生にゆめく)「散髪先生にもゆめく来た」

学習用品を授け出す。

1/9. 教育相談  
 1/11. 教育相談。

1/20 朝.  
 ・散髪先生にゆめく。  
 ・午後のバス乗車。隣の子の鉛筆。消しゴム授け出す。  
 ・ハンカチ入れの入れ替え。靴箱入れとハンカチ入れの入れ替え。  
 (母と先生との下書き授け出す。)

バス乗車。

1/12. 教育相談。

父親のメール。F-15の飛行機に入団させたい。

課題内容  
 言語5分 読解5分

医師。  
 -- 医師が向山先生。

母と先生。  
 宛先の確認(05163077)  
 05161300. 医師が向山先生に宛てたメール  
 宛先が不明。母親に確認する。  
 宛先の確認の件。

1/20 -- 母と先生

行動目標

- 石を授け出す。 数回
- 学習用品を授け出す。 数回
- 鉛筆の入れ替え 2回

数回 ..... 授け出す。 鉛筆の入れ替え。

数回 ..... 授け出す。 鉛筆の入れ替え。

授け出す。 鉛筆の入れ替え。

1/15	筆箱の授け出す	
1/18	鉛筆の入れ替え	
1/22	ハンカチ入れ	
1/23	ブラス	
1/29	足げり 頭つき	
1/30	ハンカチ入れの入れ替え	

親の面談内容

A.

1. 出産時の状態
2. 友達事故
3. 他人の人の現状<医師の話し>

I. 事実

1. 16歳頃行幸の事実
2. 管首
3. 知能

B.

4. 親の判断
5. 親の要求
6. 子の要求
7. 育ち方... 悪いところを叱る ✓
8. 子供の状況 日常生活 ✓
9. 行動特性の原因

II. 判断

1. 文部省の判断
  - 特殊教育
2. 10年前ほどの教育言
  - A. 精神障害
  - B. 脳障害
  - C. 精神薄弱
3. 発達障害



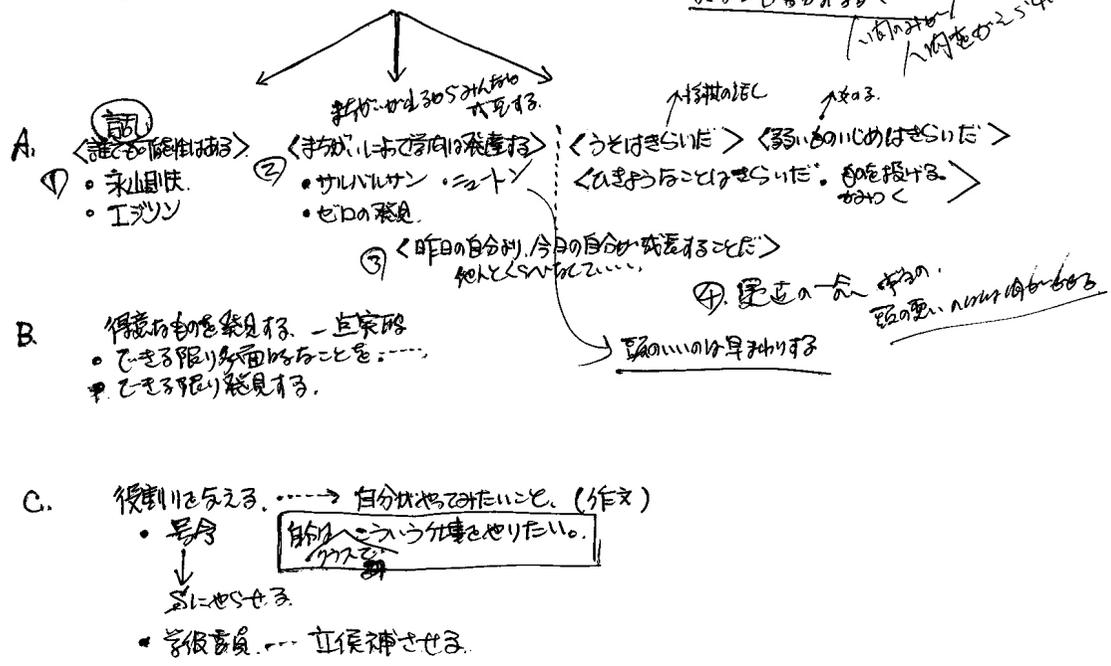
どの人とも同じ筋道で歩む  
どの人とも成長のやり方がある。  
<知能、人格>

- ※2. 行動特性
1. 黙々と馬鹿とか不安を与える(判別選)
  2. 長い目で見る。周囲をわける。と話しあける。
  3. 何ができたか。自分でできるよ。と褒める。(無言)
  4. あせないで。自分でできること。一つ一つとほめてあげる。しほり
  5. 悪いことには。悪いことを話してあげる。あはれかばいすぎない。
  6. 子供ができたこと。強く期する(ない)。常に一歩先を歩かせる。しほり
  7. 自分でできること。命令でやす。

- |             |
|-------------|
| ★ しーしを治す    |
| ★ 自信をたてる    |
| ★ 精神を安定させる  |
| ★ やる気多きをたてる |
| ★ 一つ一つ成長させる |

(子供馬鹿は... 3年の時、向山が本人の了解なく馬鹿を死にたい。4年)

⇒ 何かに力をつけてやる  
おれは自信がなくなる  
人間性を失う



合弁に

**1学期**

1. 日記をつけます。 **確** <今日は何を食ったか、一つ>  
何を食べたか。
  2. 子供達のしつけを(親に)教える。 <帰りの時間> <班会係、係り会議>
  3. 朝礼……先生が来る前、漢字の練習？ +親子とのみ
  4. 浴いた時間: **特別の勉強** —— ゲーム、算数、社会。 で、きり分け習得で……
- 先生との勉強(た)る。
5. 遊び時間。 1学期、休む。 **準備** 午の宿題。
  6. 礼に合う習慣。

D. 教科

- 算数 ?
- 国語 —— 作文、漢字
- 社会 (IV, 2311)
- 体育 —— 準備のゲームを中心。 遊びを中心<遊びの帰りに> をすての。
- 学級会…… お楽しみ会、宿題に楽しいおはに……。 etc.
- 道徳…… Aaの会話。(くり返し、くり返し)

E. 努力の習慣化

- 日記
- 漢字ノート 練習。 (勉強法)

1. 別ノートの学習の調査. やせせました  
12月  
算数  
作文

2. 生活習慣を正確にしました。

- 朝. 顔を洗う人  
歯をみがく人.
- 食卓 --- いたむさず.  
ごちそうさず.
- 右側通行  
信号ストップ (自転車止)
- あいさつ.  
しつこくして. 迷惑なことにない  
他人の自由をたない
- 机にむかう
- 〆

学級報告.

己のクニノトセオ  
己のクニノトセオ  
クニノトセオ

1. 前期. 基本理念のくりかえし.

2. 生徒の成長の様子を.

特に芝居の作文. 行状を!

お昼の話し (1日目)

○ ひき差別はいい

○ みんなわかるようにできる子は(2)でも みんなをいかにしてやる

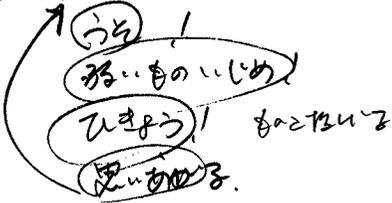
誰か可能性の子

みんなはみんなの発達の子

昨日の(1)今日の(1)はあつた  
のあつた、のあつた

発達の子、発達の子

○ 俺は俺のこども



2日目

FZの話しと具材は

テスト A. 授子

(学級委員  
規律礼号)

席順

結論.

認知力  
 認知の不足  
 身体障害  
 意志の不足



精神.

アセス!! : 1201-2428  
 不安 無視 2428  
 押さえる



行動

暴行  
終了

学校における責任.

- 自信を与えられた。
- 存在感を与えられた。

- 差別 隔離した
- 差別

- ~~差別~~ 体系的 隔離的であった。



- 存在感
- 自信

暴力と押さえる  
 共同生活の  
 手段である  
 生活自体は  
 生命の保障として  
 必要である

# 発達障害児論

獲得手段の発達

2歳 - 3歳

高次な発達ではない。

○ 2歳から3歳に集中する。

2歳から3歳にかけては、  
 高次な発達ではない。  
 高次な発達とは、  
 高次な発達とは、  
 高次な発達とは、

1. 高次な発達とは、  
 2. 高次な発達とは、

3. 高次な発達とは、  
 高次な発達とは、  
 高次な発達とは、

(1) 高次な発達とは

(2) 高次な発達とは

4. 高次な発達とは

調査.

○ 20上り. 易難

○ 4んあい.

○ 水泳.

○ 心臓と心. 前4足, 後4足.  
= 重補前. うい.

○ と心箱.

○ 文字.

住所

自分の姓名. さとんじやん. 乙. ぬい. 2.

ウイロ子. 50音.

促音字. 4の音候.

仮仮名.

助詞. 7=下八.

表現 10秒和抄同の行動の描写.

漢字. 1年生

2年生

3年生

4年生.

発表. 自演. 30秒.

読書量. 平均読本.

BC. 今読読本への印象に残ったもの.

感想の詩. 文句.

A. 物. 20上り. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20.

B. 心. 4んあい. 50音. 促音字. 仮仮名. 助詞.

C. 水泳. 前4足. 後4足. 重補前.

D. と心箱. 表現. 漢字. 発表. 読書量.

算数.

加  
減  
乗  
除

心算.

位取り. 2進法.

11 ~ 10.

④ 105107625 算合 = 合計.

演算.

$$4 \div 2 =$$

$$4n \div 2 =$$

$$4 \div 2m =$$

$$4m \div 2m =$$

立式.

④④④

④④算乙.

0 ~ ~ ~

何算乙.

遊心. 野威. ハニゴマ.  
めんこ. 拾棋  
ビニ玉. 玉目あひ  
けん玉. 用巻.  
コマ:  
竹馬.  
おひき  
おひ玉.  
木のぼり.  
ゴムあし.  
おもてこ.  
五人一首.  
輪こけ  
ハトミトン  
卓球.

トカゲをゆて. noh F = こけあそび?  
ザリガ = せゆて. けん F = こけあそび?  
カエル.  
せみ  
とんぼ.  
カト虫.  
ハビ.  
・遊んで... けん F = こけあそび?  
・ — — — けん F = こけあそび?

- テレビの視聴時間
- 家での勉強時間
- 行事の行き方
- 町内割りはいくら
- 宿題はいくら
- 4... 毎
- 子... 頃... まで

- 父親に... して
- 母親に...
- 兄弟姉妹
- 友人
- 教師に...

- 目的の... 点
- 目的の... 点

- 希望の... 点
- ... 点
- ... 点
- ... 点

- |      |       |       |
|------|-------|-------|
| • 知能 | • 車   | • 点   |
| • 数学 | • 本   | • ... |
| • 鉄道 | • 25分 | • ... |
| • 地図 | • 映画  | • ... |
| • 天文 | • ... | • ... |
| • 生物 | • ... | • ... |

1. 毎日、一定時間、礼=向う習慣。

● 痛題は、Xの日のうちに済す。

● 日記は、毎日書し。

● 好きの勉強をしない

(地味でも、本を読む)

(2-3日-27日  
7-27日...)

いかに早く勉強をする

● 好肉食は、Xの日のうちに準備する。

2. 毎日、家の中で決った仕事を命題する。

(Xを限り投下活動量の多... 少) 継続的仕事

● 日記は、Xの日の  
Xを限りの日記...

3 食事の時間などに、Xの日の子供の生活を語りあててほしい。

また日記を書く。

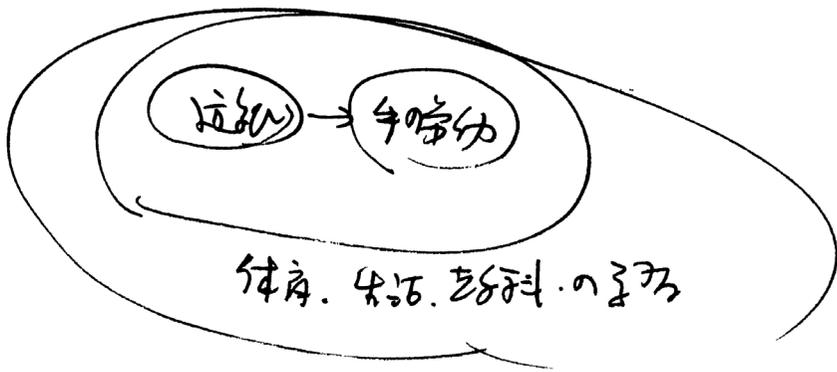
「... 日記は、Xの日の、Xを限りの日記...」

日記は、Xの日の日記。

1. 話しを聞かせること
2. 話しを聞かせること
3. 書きを聞かせること
4. 書きを聞かせること。 -- 話しを聞かせること

16. 思考行動 ⇒ 発達を促す。

あそびの場としての  
仲間と遊ぶ  
(あそび) と入浴



身体に障害のある社会生活は差別教育。  
 身体障害者の可能性を説く。  
 社会の矛盾や抵抗に直面させ。  
 社会に受け入れられる人間性と同様可。  
 < 差別教育の解放教育 >

1962.

小嶋 悠紀

## 1. かの有名な「嵐のように長く続く拍手」 の実践に隠された綿密で科学的なアセ スメント

「嵐のように長く続く拍手（スナイパー No.42 1977.4.25）」は、向山実践の中でも最も有名なドラマといってよい。S君に対する教師向山洋一の執念に誰しもが心を揺さぶられたであろう。

今回発見された資料は、そんなドラマの裏側の「台本」を見ているかのような驚愕の資料となっている。

向山氏は、

S君の行動をどのように捉えたのか？

前年度 S51 年（1976 年）の報告会の記録を向山氏は、

「目に見える行動」を「回数」で括り出している。

私がアメリカから持ち帰ってきた資料に「子どもの問題行動カウントチャート」というものがある。

「具体的なカウントできる行動」を一定期間の観察で「回数で把握する」というものだ。

これらの考え方のベースになっているのが、米国の心理学者スキナーが始めた「行動分析学」の中でも ABA（応用行動分析）である。

向山氏はこの行動分析学を知っていたの

であろうか。日本で行動分析学学会が発足したのが 1987 年である。つまり、今と言う発達障害の子どもの問題行動を科学的にアセスメントするという感覚を、向山氏が自身の感覚としてこの当時にすでに持っていた事になる。

今も学校現場では、「あの子は暴力的な子だ」「あの子は発達障害だから手が出る」という「大人の主観や感想」による捉えが横行している。しかし、発達障害の子どもの問題行動改善には、「具体的に数えられる行動」を「一定期間に観察」を行い「数としてカウント」して「傾向を掴む」ということが初期アセスメントしてとても大切である。そして、その中から最もアプローチしやすい箇所へ支援を展開していくのである。

また、A18-03-01 のメモにも向山氏の科学的なアセスメント感覚が現れている。S君の「行動要因」を探る図である。向山氏はそれを「結論」「精神」「行動」の3つに分類し整理をしている。「行動」を1つ独立させて捉えているだけでも、現代の多くの先生はできていないだろう。

それだけではない。

向山氏の「結論」を今の言葉に修正すると、「要因」である。行動を引き出すきっかけとなる本人の中にある特性である。ここに書かれている4つは見事にS君の要因を表現している。

その上で、それらの要因が引き起こしてしまったことを「精神」として5つに的確にまとめている。これらは問題行動発生の「主

困」となる。それらが「暴力 学習」という行動に結びついていると結論づけているのである。

これはまさに認知心理学・認知機能分析の基本である、「感覚→認知→行動」で子どもの行動を分析すると同じ流れなのだ。

これらに向山氏は 1977 年の段階で S 君の理解のために実行していたことが心からびっくりさせられる。

そして、実は「感覚→認知→行動」の分析できたのであれば、上の 3 つのどれにアプローチするかを決めて支援やケアを行うのだ。さて向山氏はどのようなプランを立てたのであろうか。

## 2. 向山氏の S 君へのプランから見るドラマへの布石

まず向山氏は、A18-03-01 メモの中で、S 君の行動の表れは、「学校における責任」であることを明記している。ここを出発点としたのである。

その上で、メモの最後に「存在感」「自信」を取り戻すことを支援の最終目標とするように結論づけている。

これは先ほどの「結論（感覚）→精神（認知）→行動（行動）」の中のどれにアプローチすることになるのだろうか。これは「精神（認知）」を変えると言うことだ。現在で言う「CBT（認知行動療法）」を行うということである。

そのための具体的な方策が記されているのが A18-01-01 のメモである。

1～7 の方針も全て現代の特別支援教育ともマッチしていてすごいが、小嶋が注目したのは、「四角囲いの★」である。

- ★ルールを教え
- ★自信を持たせ
- ★精神を安定させ
- ★やる気を起こさせ
- ★1つ1つ成長させる

これらの順番が大切なのだ。まずは「ルールを教える」ことで、基準を作ることだ。教えなければルールやスキルは分からないことを前提としたのである。基準があればそれでほめることができる。その結果、自信を持つ。さらにルールと強化刺激によって安定した行動が出る。次々に成功サイクルが回るので、やる気が上がっていき、1個1個成長していく。

理想的な特別支援教育のサイクルが登場する。これらサイクルから S 君の「行動でなく、認知を変えること」を狙ったと推測するのである。スナイパーのあの S 君との対決も、まさに彼の中にある「認知の修正」を迫ったものであり、これらのメモがその根拠となったと言っていいいであろう。

これらの出来事は、発達障害を持つ子どもが全てが通級対象となった 2006 年よりも 30 年前の出来事なのである。

奇跡以外の言葉が見当たらない。



4月特典

No.05 | 2024年4月

## 向山洋一 教育資料

## 1977 特別支援教育「ぼく死にたいんだ」

発行日 2024年4月5日

発行所 向山洋一教育技術研究所

所在地 〒142-0064 東京都品川区旗の台2丁目4番12号



谷和樹の教育新宝島

<https://shintakarajima.jp>

向山洋一公式サイト

<https://mukoyamayoichi.com>

このPDFは、プリンタの「冊子印刷」を選択すると冊子になります。  
他人への譲渡および個人研究以外の目的で使用することを禁じます。